

清野賀子

《『The Sign of Life』より  
ブロック塀 千葉》



清野賀子(1962-2009)  
《『The Sign of Life』より ブロック塀 千葉》

2001年  
タイプCプリント  
37.4×55.0(50.7×60.9)cm  
平成26年度清野良民氏寄贈

と

ころどころすすけたように黒く汚れた古びたブロック塀。工場か何かの塀なのでしょう。上部には有刺鉄線が張られ、路面との際には雑草が生い茂り、右手の方には「6339」という落書きがあります。この一見、殺風景で空虚な光景を捉えた写真は、『The Sign of Life』と題された連作からの一点です。

作者清野賀子は編集者としてのキャリアを積んだ後、一九九五年頃より写真家に転身しました。中判カメラとネガカラーフィルムを用いた風景写真により評価され、二〇〇二年に最初の写真集としてまとめられたのが、『The Sign of Life』という連作です。

連作を構成するのは、ここに紹介した作品のように、郊外の空き地や工業団地の道路など、自然と人為の交錯する現代の風景です。いずれも画面には人の姿はなく、とくに何ごとかが起きている様子もありません。しかしよく見ると、構図は慎重に決められており、季節や光の状態も意図的に選択され、色彩も繊細にコントロールされています。見過ごされがちな光景に独特の感受性で反応し、そうした場所に「Sign of Life = 生命の徴」を見出す。作者固有の世界へのアプローチが浮かび上がります。

この写真で言えば、ブロック塀の上の有刺鉄線は画面のほぼ真ん中を走ってお

り、路面とブロック塀が形成する人工物と、背景としての空の占める領域とを、画面の上下二分の一ずつに分割しています。ずっと長く続いていそうなこのブロック塀のなかで、どうしてこの部分を選んだのか。おそらく落書きが画面の中で果たす役割も計算に入れていたのでしょう。

その落書きの文字のかすかな黄色や雑草の緑や褐色も、コンクリートとアスファルトのくすんだグレーが支配する画面全体のトーンに、控えめに生気を与えています。このように空虚に見えた画面の隅々に、さまざま存在が見えてきます。

では作者はこの光景にどのような「生命の徴」を感じとったのでしょうか。もしかすると作者の意図は自らの見出したものを伝えることではなく、写真を見る私たち一人ひとりに「あなたはどのような徴を見つめますか」と問うことにあるのかもしれない。あるいは、その繊細な世界へのアプローチの方法自体を共有するためにこそ、これらの写真は私たちの前に示されているのかもしれない。

短い活動期間ながら、新たな風景写真表現の試みとして注目された写真家の代表的な作品『The Sign of Life』と「a good day, good time」の二つのシリーズから全二十四点を、この度、ご家族のご厚意により受贈しました。

(美術課主任研究員 増田玲)